

『藩士名寄』に見る尾張藩御役者の代々 (二)

——田中源之丞家・安田(宝生)家・大野家・丹羽家——

飯塚 恵理人

先回の紀要に、金春八左衛門家・林(金春喜左衛門)家という金春流のシテ方の家の事蹟について述べた。今回はそれに続いて、田中源之丞家・安田(宝生)家・大野家・丹羽家という、金春流として抱えられながら、途中で宝生流に転流させられた家の代々について、名古屋市蓬左文庫・徳川林政史研究所²に所蔵されている二種類の『藩士名寄』を中心に、現在の段階で入手できた資料を加えて述べたいと思う。(引用させて頂いた二種類の『藩士名寄』のうち、名古屋市蓬左文庫所蔵のものを『名寄(蓬)』と、徳川林政史研究所所蔵のものを『名寄(林)』と、それぞれ略称した。)

一 田中源之丞家

田中家は金春流の大夫役として抱えられたが、三代で絶家となっている。『名古屋市史 風俗編』³(以下『市史(風)』と略称)によれば、二代目以降は宝生流へ転流させられているが、『藩士名寄』には、三代目からの転流のようにも読めるように書かれている。安田家はこの田中家の弟子筋とされていた。田中家の転流と絶家の事情は尾張藩の

能役者の管理に関して興味深い事例であるので、その事蹟を考えてみたい。

初代 源之丞

初代について、『市史(風)』は

田中源之丞は金春流竹田権兵衛の門に出づ、貞享五年、始めて藩主綱誠に謁し、太夫に召出され、切米六十石、切符金二十両、扶持江戸六口、尾州四口を給せらる、元禄十四年退隠し、素秋と号す、

とする。『名寄(蓬)』を引用すると、

田中源之丞

一 貞享五(一六八八)辰九月、泰心院様御部屋之節初而御目見いたし、無足ニ而御役者六年相勤

一 元禄七(一六九四)戌四月、御切符金三拾両・御扶持常三人分被下置

一 同十四(一七〇一)巳六月廿九日、源之丞儀年更病氣付物覚無之難相勤ニ付、隠居をも仕緩々養生仕度旨、依願御免被遊、悴同姓半平儀、源之丞通御切米・御金被下置

とする。泰心院は、尾張藩三代藩主綱誠である。初代は無息であった貞享五年から元禄一四年まで十三年ほど仕えたことになる。元禄一三年十月に光友が死去しており、これによって御役者の移動がかなりあったものであろう。

二代 源之丞(半平)

二代について『市史(風)』を引用すると、「其子半平 源之丞と改名 二代目を相続し、尋いで金春より宝生に改流す、宝暦七年卒して、」となる。『名寄(蓬)』を引用すると、

御役者

田中源之丞倅

源之丞

御切米八拾石

田中 半平

一 元禄十四(一七〇二) 巳六月廿九日、父源之丞年寄病氣付、

依願御免、源之丞被下置候通、御切米六拾石・外金貳拾両被下置旨被仰出

御扶持方、江戸六人分・尾州四人分

一 宝永七(一七一〇) 寅三月、源之丞と改名

一 享保七(一七二二) 寅六月十九日、金春喜左衛門病氣付、数

年之間、江戸・尾州之御用者人ニ而相勤、傳受事等其外惣躰精出し宜相勤候旨、御用人申達ニ付、只今迄之御合力金貳拾両、

御切米貳拾石ニ御直、都合八拾石被成下之旨被仰出

一 同十二(一七二七) 未五月廿九日、近年御儉約ニ付、諸事心付宜出精相勤ニ付、為御褒美銀五枚被下置

一 宝暦七(一七五七) 丑五月十五日病死

となる。二代目は金春喜左衛門の病氣の際、役儀を多く勤めたとされている。この金春喜左衛門は五代目であり、『名寄(蓬)』には「享保八(一七二三) 卯六月十二日、病身ニ而、久々御用をも不相勤候付隠居」と記されている。後を継いだ六代目権三郎も二年余りで病死しており、この時期喜左衛門家は活動できる状況になかった。

表章氏は、「田中半平(後に源之丞)は綱誠の子の四世吉通治世期の元禄十六年に、主命で宝生流に転じた。綱誠時代から江戸藩邸の能では宝生太夫友春が重用されており、綱吉の宝生流鼈貞に合わせたのであろう。」と言われている。

三代 源之丞(百一郎)

三代について『市史(風)』を引用すると、

(宝暦七年卒して、)百一郎 源之丞と改名 三代目を相続す、

宝暦十二年、町人に非ざれば借用を許されざる公金を偽つて借用し、返済に窮して、町預りと成りたるによりて免職となる、

となる。『名寄(蓬)』を引用すると、

御役者

田中源之丞倅 源之丞

田中 百一郎

一 享保十二(一七二七) 未十二月、始而晃禅院様江御目見

一 寛保元(一七四一) 西十二月十五日、父源之丞家芸も功者ニ而数拾年相勤、其上役儀之御用筋をも宜取扱候付、父勤功を以

被召出、年々銀拾枚充被下置候、弥家芸出精可致修行旨被仰出
一 寛保二(一七四二) 戊正月、江戸四人扶持・尾州三人扶持被

成下

一 延享元（一七四四）子四月十九日、父源之丞儀、年来出精致勤勞候付、御加銀拾枚被下、都合銀貳拾枚被成下

一 宝曆七（一七五七）丑七月朔日、父田中源之丞致病死、末期願置候趣及言上候処、源之丞儀、家芸宜数拾年無故障相勤候者之儀ニ付、百一郎江御切米六拾石・外ニ銀貳拾枚被下置大夫被仰付候、弥家芸無油断相励流儀家元之事も候間、宝生太夫風義を移し、出精可致修行旨

百一郎儀、江戸詰扶持六人分・尾州逗留扶持四人分被下置筈、尤百一郎江是迄被下候御合力金銀ハ上リ候筈

一 宝曆七（一七五七）丑七月、源之丞と改名

一同十二（一七六二）午七月廿一日、町人之外借付無之公金町人と偽致借用、上納滞候付、町奉行所裁許ニ相成、追々日切を以上納之儀申渡有之候処、段々及延引候付、所預ニ相成居候旨、然処当五月右上納銀差出事済由ニ候得共、御扶助之身分ニ而、謀言を以證文等差出し、公金借用、剩上納差滞、一旦所預ケニも相成、彼是不都合之及仕儀之段、甚以不埒之至候、依之御充行被召上、御暇被下候

住所ハ構無之筈

となる。

三代目は宝曆一二年に出版された『改正 能訓蒙図彙』⁶の、京都部の大夫の宝生流の項に「尾州 伏見海道九町目 田中源之丞」として載る。この本が出版された宝曆一二（一七六二）年は三代目が「御暇」になった年であり、この記事もその直前の情報によっていると思われる

る。三代の特徴は「父勤功」によって召し出されていることで、父の勤務を理由に加銀を受けた記事もある。父親が金春喜左衛門の病氣による名代を引き受けていることによるのだろう。二代から三代への相統は『名寄（蓬）』に「末期願置候趣及言上候処」と末期願によるものであり、実子相統ではないのではなからうかと疑わせる。家督相統も「源之丞儀、家芸宜数拾年無故障相勤候者之儀ニ付」ということで父親の功を重視している。ここまで父親の評価を強調する裏側としては、尾張藩の百一郎の評価が高くなかった可能性もある。この相統の際に「流儀家元之事も候間、宝生太夫風義を移し」と宝生流に移ったとされる。この時期に宝生流に移ったとすれば、三代は宝生流に移って六年足らずで解雇されたことになる。町人と偽って「公金」を借りて返済出来なかったための「御暇」となっているが、相統以前から百一郎の評価が高くなかったことや、途中から宝生流に流儀を変えたためうまく適応出来なかったのではという理由も考えられる。

二 安田（宝生）家

安田家は、初代が金春流で田中源之丞家に付けて抱えられた。『名寄（林）』に四代金三郎・五代鍔五郎の記事が載る。四代金三郎の初名は初太郎であるが、初代から四代の相統までの記述を、『市史（風）』から引用すると、

安田傳六は宝生流田中源之丞の門弟にして、連役を専門とす、貞享五年、始めて綱誠に謁し、元禄七年より切符銀扶持方を給せらる、元禄十四年より切米二十石、扶持江戸四口、尾州二口、享保

八年職を辞し、其養子又次郎二代目を續ぐ、彼は宝生太夫の直弟にして、連役を専門とし、勤統四十五ヶ年にして、宝暦十三年、職を辞し、其子金三郎 江戸宝生太夫門弟 三代目を継ぎ、太夫並役に召出さる、明和二年、宗睦長子治休の命により「望月」を演ず、翌年、家元より「道成寺」の伝授をうく、同七年、太夫本役に墜り、安永三年卒す、四代目初太郎幼なり、江戸に出でて修行す、

となる。『市史(風)』では、初代安田傳六を「宝生流田中源之丞の門弟」とするが、初代が召し抱えられた貞享五年は初代田中源之丞の時期であり、この時期の田中家は金春流であったから、初代は金春流であったと考えて良い。宝生流に転流した時期は不明である。この家は初代から連役を専門とした。初代から二代への相続は養子相続だが、金春流ではなく宝生流のものを養子に指名した可能性もある。三代目の相続は田中源之丞の御暇の翌年であるが、田中家の絶家によって、それ以前連役であった安田家が尾張藩の宝生流の家として筆頭となつて行く。

四代 金三郎(初太郎)

四代について『名寄(林)』は、

金三郎倅

安田 初太郎

宝生 天明四(一七八四) 辰二月 金三郎

一 安永四(一七七五) 未十二月九日、御憐愍を以年々金拾両ツ、被下置、御同朋支配ニ相成。

一 天明八(一七八八) 申十二月廿一日、御切符銀式拾枚被下置、

(四)

大夫並被仰付、御扶持之儀、江戸四人分・尾州三人分被下置。

一 寛政六(一七九四) 寅十一月廿六日、御加銀拾枚被下置。

一 同八(一七九六) 辰十二月廿六日、御大夫被仰付、御切米三十拾石被成下、江戸五人扶持・尾州三人扶持被成下。

一 同十三(一八〇二) 【寅】 酉正月十一日、家芸出精相勤候付、御加増米拾石被下置。

一 同十二(一八二九) 丑四月宝生与改姓、此已後はノ部ニ入(飯塚注：文政十二。順序逆転している。)

一 文化八(一八一二) 未十二月九日、江戸御扶持六人分・尾州御扶持四人分ニ被成下。

一 文政二(一八一九) 卯正月十二日、家芸格別出精仕候付、御加増米拾石被下之。

とする。この金三郎は宝生に改姓しており、改姓後の記事が『名寄(林)』の宝生金三郎の項に載る。これを引用すると、

安田金三郎事

宝生金三郎

一 文政十二(一八二九) 丑四月、御大夫安田金三郎事、宝生与改姓、此以前やの部ニ見ル。

一 同(一八二九) 年五月二日病死。

となる。金三郎の場合、宝生への改姓の届があつて一月あまりで病死届が出ている。藩への死亡届は、跡の相続者が決まってから出されるのが通常である。これはもう四月の段階で金三郎が死去した、もしくは死去が目前であつたため、家元が金三郎のために安田という弟子家に宝生の姓を許したものでなかろうか。金三郎が舞台で宝生姓を名

乗ったことはおそらくなかったと考えられる。

安田鷹五郎

四代金三郎の晩年に、一代抱えとして切符金を受けた者に安田鷹五郎がいる。一年半程度で「実方」へ帰っており、養子であったと思われる。『名寄（林）』を引用すると、

金三郎悴

安田鷹五郎

一文政十（一八二七）亥正月十一日、父金三郎儀、数十年出精相勤、其方儀も追々御用相勤、家芸出精上達仕候付、年々銀拾枚ツ、被下置、弥出精可令修行旨。

御扶持方之儀、江戸四人分・尾州三人分被下之。

一同十一（一八二八）子七月五日、被下銀御扶持方差上、実方江立戻。

となる。鷹五郎が去ったため、改めて養子として鍔五郎が入り、相続したものと思われる。

五代（宝生）鍔五郎

宝生姓を実質的に名乗ったのはこの五代鍔五郎のみである。『市史（風）』には、

宝生流の太夫に宝生金三郎を召出す、其年代詳ならず、其子鉄五郎、文政十二年に父の跡に召抱へられ、切米三十五石、扶持方江戸五口、尾州三口を給せられ、江戸に住す、若年の時は宝生太夫、古春左衛門後見となる、後役者御用取扱を命ぜらる、其後の事詳ならず、

と載る。『名寄（林）』には、

金三郎養子

宝生鍔五郎

一文政十二（一八二九）丑七月廿九日、若年之事ニハ候得共、御用立候迄ハ宝生太夫引請、御用之節ハ宝太夫并古春左衛門相勤候事ニ付、親跡大夫被召抱、御切米三十拾五石被下置。

御扶持之儀、江戸五人分・尾州三人分被下候。

一 嘉永元（一八四八）申十二月廿七日、常々心懸薄趣ニ相聞候、太夫之儀ハ御役者共一統之目當ニも相成、且御役者御用向取扱をも被仰付置候儀ニ候處、右躰等閑之心懸ニ而ハ締筋ニも閑り、旁不束之事情、依之御役者御用向取扱差免候様ニ与被仰出。

一 明治二（一八六九）巳十月八日、三等兵隊申付候。

と載る。文中の「宝太夫」は「宝生太夫」の誤記であろう。御役者御用取扱を命じられたが、嘉永四年末には免じられている。「常々心懸薄趣ニ相聞」とあり、尾張藩からの評価は低かった。嘉永元年に大野時太郎が大夫に昇格しており、大夫役が他にいたことも鍔五郎の処遇に影響を与えたと考えられる。

三 大野家

大野家は、『大野氏代々勤書』⁷が存在することから、他の家と比較して資料的に恵まれている。明治維新から明治一二年には井桁町の大野藤五郎舞台が演能の中心となっている。

初代 彦七

『市史（風）』には、「大野彦七は春藤流 金春流の脇師 藤馬加右衛

門の門弟なり、同姓久寿と云ふもの、松平義昌 光友の子 に仕へたる由緒を以て、貞享二年、光友に召出されて、地謡を命ぜられ、切米二十石、扶持常五口、江戸六口を給はる、元禄九年老して、(其子彦次郎二世をつぐ)とある。『勤書』を引用すると、

初代地謡役

一 御切米式拾石

大野彦七

常御扶持方江戸六人分・尾州五人分

右は、同姓寿軒与申者、得安院様御医師相勤罷在、思召ニ相叶者故、其由縁を以、二男同姓彦七儀、御側御出入被仰付。生得能声ニ而、謡曲達者ニ仕候付、常々御謡・御仕舞等御相手被仰付候処、貞享二(一六八五)丑年、瑞龍院様依御懇望、御表江被召出、御相手・御地謡被仰付、御譜代可被為召仕旨被仰渡、御充行三拾石可被下置候得共、古く相勤罷在候者共、未三拾石之俸被為差置候御事ニ付、新古之御差別を以、御切米式拾石・常扶持方江戸六人分・尾州五人分、都合三拾石同様被下置旨被仰付、難有厳命之趣、先祖代々申傳罷在候。右之通ニ而、元禄十(一六九七)丑年迄十三ヶ年御奉公仕、隠居仕候。

となる。『市史(風)』では彦七が抱えられる原因となった人物を「久寿」とするが、『勤書』では初代彦七の親にあたる「寿軒」とする。

また『勤書』によれば、貞享二年に光友に召し抱えられた時、既に譜代席として抱えられていた役者と区別して、切米が減らされており、その分を扶持米で調整することがなされていたことになる。また大野家は田中源之丞家の門人ではなく、『市史(風)』には金春流の脇師藤馬加右衛門の門弟とされている。いずれにせよ、素人から御役者に登

(六)

用した者であると言える。また、初代の隠居は『市史(風)』には元禄九年とあるが、『勤書』によれば、元禄一〇年である。

二代 彦次郎

『市史(風)』には、「(元禄九年老して)其子彦次郎二世をつぐ、元禄十二年卒、」と載る。『勤書』には、

二代目

一 御切米式拾石

大野彦次郎

常御扶持方江戸六人分・尾州五人分

一 元禄五(一六九二)申年被召出、御切符金壹枚・御扶持方式人分被下置候。

一 元禄十(一六九七)丑年、親跡江被召出、御切符金・御扶持方被召上、御切米・御扶持方無相違被下置。元禄十二(一六九九)卯年迄都合八ヶ年相勤病死仕候。

とある。二代は初代の跡を継いで二年ほどで亡くなっている。二代としての活躍年代は短かったと言える。

三代 彦七

『市史(風)』には、「三代目彦七、延享二年卒す、」と載る。『勤書』には、

三代目

一 御切米式拾石

大野彦七

常御扶持方 江戸六人分

尾州五人分

一 元禄十二(一六九九)卯年、彦次郎跡江被召抱、御切米・御扶持方無相違被下置。延享二(一七四五)丑年迄、四十七ヶ年

相勤、病死仕候。

と載る。

四代 友七

『市史(風)』には、「四代目友七、実は山口九兵衛の次男にして、彦七養子となる、明和九年卒す、共に田中源之丞の門たり、」とある。

『勤書』には、

一 御切米貳拾石

御扶持方 江戸四人分

尾州貳人分

四代目

大野友七

一元文三(一七三八)午年^五、無息ニ而八ヶ年相勤、延享二(一七四五)丑年、彦七跡江被召抱、御切米・御扶持方右之通被下置。明和九(一七七二)辰年迄廿八ヶ年、又無息勤共都合三拾五ヶ年相勤、病死仕候。

と載る。『改正 能訓蒙図彙』が作られた年代はこの四代目の時代に相当するが、同書には載らない。

五代 彦三郎

『市史(風)』には、「五代目友三郎、後に彦七と改め、又友三郎に返る、実は山田兵右衛門の子なり、明和九年、宝生流の地謡に召出され、江戸に修行す、寛政元年、安田金三郎の連役に転ず、」となる。大野家が宝生流に転流したことを確認できるのはこの五代目からである。

『勤書』を引用すると、

大夫格

五代目 大野彦三郎

一 御切米貳拾五石

御扶持方 江戸四人分

尾州三人分

役料金貳分

一 明和五(一七六八)子年、御謡初之節^五、無息ニ而五ヶ年相勤、同九(一七七二)辰年十月、養父友七跡地謡役被召抱、御切符金七両・御扶持方江戸三人分・尾州貳人分被下置候。

一 安永九(一七八〇)子年、御加金三両被下置候。

一 天明六(一七八六)午年、御切米拾五石被下置。御切符金被召上候。

一 寛政元(一七八九)酉年、連役被仰付候。

一 寛政九(一七九七)巳年、御加増米五石被下置候。

一 文化十一(一八一四)戌年、大夫格被仰付、御加増米五石被下置候。

一 文化十二(一八一五)亥年七月、上使御用之節、本役同様役儀被仰付候。

一 文化十二(一八一五)亥年、御加扶持江戸壹人分被下置候。

一 文化十三(一八一六)子年、御謡初御用之節、本役同様、役儀ハ勿論、拝領物被仰付候。

一 文化十三(一八一六)子年八月、御役者御用取扱被仰付、年々役料金貳百足ツ、被下置候。

一 文化十五(一八一八)寅年、御謡初御用之節、前振同様被仰付候。

一 文化十五(一八一八)寅年三月、御加扶持尾州壹人分被下置候。

一 文政二(一八一九) 卯年閏四月、上使御用之節、前振同様役儀被仰付候。

一 文政三(一八二〇) 辰年、御謡初御用之節、前振同様被仰付、都合御切米貳拾五石被成下置。明和五(一七六八) 子年、無息ニ而御用相勤候而、文政三(一八二〇) 辰年迄、都合五拾三ヶ年勤役仕病死仕候。

となる。『名寄(林)』には、

大野友三郎

寛政九(一七九七) 巳七月二日 彦三郎

一 明和九(一七七二) 辰十月十日、父友七跡御役者地謡被召抱、御切符金七両・御扶持江戸三人分・尾州式人分被下。

一 安永九(一七八〇) 子三月廿九日、家芸出精達者ニ相勤候付、御加金三両被下、都合御切符金拾両被成下。

一 天明六(一七八六) 午四月廿六日、御切米拾五石被成下。

一 寛政元(一七八九) 酉五月廿六日、安田金三郎連役被仰付。

一 同九(一七九七) 巳正月十六日、御加増米五石被下置、都合御切米貳拾石ニ被成下。

一 文化十一(一八一四) 戌十一月廿六日、多年芸道出精仕候付、大夫格被仰付、御加増米五石被下之。

連役之儀も、是迄之通可心得旨。

一 一代切大夫格被仰付候段、可心得旨。

一 同十二(一八一五) 亥十二月晦日、江戸御扶持四人分被成下。

一 同十三(一八一六) 子八月十七日、御役者御用取扱被仰付、年々役料金貳分ツ、被下。

一 同十五(一八一八) 寅三月朔日、尾州御扶持三人分ニ被成下。
一 文政三(一八二〇) 辰二月四日病死。

と載る。『青窓紀聞』には、大野舞台の名前で井桁町にあった彦三郎の家の舞台が登場する。

六代 時太郎

『市史(風)』には「其子六代目時太郎、文政三年に地謡に召出され、同五年より安田金三郎の連役を命ぜられ、又地謡を兼ね、天保六年太夫格、同十三年一代限太夫並、嘉永元年一代限太夫となる、」とある。『勤書』を引用すると、

大夫當時在勤

六代目 大野時太郎

一 御切米四拾石 当戊五拾四歳

御扶持方 江戸五人分

尾州三人分

一 文化十三(一八一六) 子年正月、御城御奥御舞台ニ而、御慰御能御難子被仰付、無息ニ而、初而御用相勤申候。御当日中奥江被召出、幼年ニ而御用相勤、御慰ニ相成候由ニ而、御扇子・中啓巻本、大扇巻本御側々拝領被仰付候。

一 文政三(一八二〇) 辰年、拾貳歳ニ而、親跡地謡役被召抱、御切米貳拾石・御扶持方江戸三人分・尾州式人分被下置。同年願之上江戸表江罷下、師家宝生大夫江隨身、修行仕罷在候。

一 文政五(一八二二) 午年、連役被仰付候。

一 天保六(一八三五) 未年、芸道格別出精仕候付、太夫格被仰付、御加増米五石被下置候。

一 天保十三（一八四二）寅年、芸道格別存入、厚出精上達仕候付、太夫並被仰付、御加増米拾石・御扶持方江戸五人分・尾州三人分被下置。御役者御用取扱被仰付、右ニ付詰ニ相立候筈被仰渡、詰御扶持方五人分并路銀金年々六兩ツ、被下置候。源懿様御稽古之節之御相手御用被仰付、出精相勤申候。

一 嘉永元（一八四八）申年、大夫本役被仰付、御加増米五石被下置、都合御切米四拾石ニ被成下置候。

一 同四（一八五一）亥年、当分江戸定詰ニ而可相勤旨被仰渡、御役者御用取扱私一人ニ被仰付候。源懿様思召ニ而、源欽様、田安御屋形ニ御出被遊候節、御稽古御相手ニ被仰付、御家御相続被遊候も猶更出精相勤申候。

一 嘉永年慎徳院様思召ニ而、中奥御舞台御能之節、役儀被仰付、相勤申候。

一 両地御謡初・御用始・上使御用・御祝儀御能・御雛子等之廉々并御慰御能・御雛子等無懈怠出精相勤申候。

一 文政三（一八二〇）辰年、親跡被召抱候而も、当文久二（一八六一）戌年迄四拾三ヶ年勤役仕、又文化十三（一八一六）子年無息ニ而御用相勤候而もは都合四拾七ヶ年相勤申候。

となる。『名寄（林）』には、

大野時太郎

一 文政三（一八二〇）辰四月十二日、若年之事ニは候得共、御用立候迄ハ矢田金之丞并大山義六致後見、御用之節は名代相勤候事ニ付、親跡御役者地謡被召抱、御切米式拾石被下之。

御扶持方之儀、江戸三人分・尾州式人分被下置。

一同五（一八二二）午十一月六日、安田金三郎連役被仰付、地謡をも兼可相勤旨。

一天保六（一八三五）未正月十一日、芸道格別出精仕候付、太夫格被仰付、御加増米五石被下置。

連役地謡之儀も、是迄之通可相心得候。

一 一代切大夫格被仰付候段、可心得旨。

一同十三（一八四二）寅十二月廿六日、芸道格別存入、厚出精上達仕候付、大夫並被仰付、御加増米拾石被下置。

御扶持方之儀、江戸五人分・尾州三人分被成下。

一同日、連役地謡兼相勤候儀被相解候、右ハ以後家格ニハ不相成、全一代切之積可心得旨。

一 嘉永元（一八四八）申五月廿四日、芸道格別宜仕候付、御大夫被仰付、御加増米五石被下置。

一同日、全一代切之積可心得旨。

一文久二（一八六二）戌五月廿日、願之通御暇被下置。

と載る。

七代 藤五郎

七代目について『市史（風）』を引用すると「七代目藤五郎、天保七年相続して明治維新に至る、」となる。

『勤書』には、

一 御切符銀拾枚

連役並地謡兼

當時在勤時太郎養子

御扶持方 江戸三人分

大野藤五郎

尾州式人分 当戊（一八六二）四拾六歳

初利喜五郎

一 天保二(一八三一)卯年、願之上江戸表江罷下、師家宝生大夫方江寄宿修行中、三ヶ年之間、雑用金五兩ツ、被下置。又願繼共、都合五ヶ年之間、五兩ツ、被下置候。

一 天保三(一八三二)辰年四月、源傳様御任官御祝儀御能之節、宝生大夫方相勤、右初而御用、御謡初御用・御慰御能・御囃子等々節々、無懈怠出精相勤申候。

一 天保七(一八三六)申年、順養子、願之通被仰付候。

一 天保十一(一八四〇)子年正月、芸道追々上達仕候付、銀五枚ツ、被下置候。

一 弘化四(一八四七)未年二月、芸道格別上達仕候付、御加銀五枚ニ被下置、都合銀拾枚ニ被成下置候。

一 同(一八四七)年八月、願之上、江戸表江罷下、師家宝生大夫江隨身修行中、御次稽古被仰付、出精相勤申候。源懿様・源欽様・中納言様、右御御相手等、両地御用共出精相勤申候。

一 萬延元(一八六〇)申年正月、連役並地謡兼可相勤旨被仰付、御切符銀拾枚・御扶持方江戸三人分・尾州式人分被下置。是迄被下置候雑用銀拾枚ハ、引揚候旨被仰渡候。

一 天保十一(一八四〇)子年、被召出候而、当文久二(一八六二)戌年迄、式拾三ヶ年相勤申候。又天保三(一八三二)辰年、無怠ニ而、御用相勤候而、江戸御国(以下紛失)

と載る。『勤書』は原本の最後が切れていたらしく、この資料そのものに(以下紛失)と書かれている。『名寄(林)』には、

大野藤五郎

一 天保十一(一八四〇)子正月十九日、芸道上達追々御用をも相勤候付、年々銀五枚ツ、被下置、弥出精修行可仕候。

一 弘化四(一八四七)未二月廿九日、芸道格別上達仕候付、御加銀五枚被下置。

一 安政七(一八六〇)申正月廿八日、連役並被召抱、御切符銀拾枚被下置候。

御扶持、江戸三人分・尾州式人分被下置候。

一 是迄被下置候雑用銀ハ引揚候。

一 文久二(一八六二)戌五月廿日、親跡御役者被仰付、御切米式拾石被下置候、連役地謡兼可相勤候。

御扶持之儀、江戸三人分・尾州式人分被下之候。

一 是迄被下置候銀子御扶持ハ引揚候

一 明治二(一八六九)巳十月八日、三等兵隊申付候とある。藤五郎は時太郎の養子であり、しかも年齢が近い。このため切米を受ける譜代席になったのは文久二年であるが、それは切符銀を得る一代抱えとなってから実に二十年以上たった後である。『勤書』の藤五郎の部分には、「当文久二(一八六二)戌年」と、文久二年に書かれたことが記されているが、この『勤書』は藤五郎が譜代席になる時に尾張藩に提出したものの写しであったと考えられる。

四 丹羽家

丹羽家も田中源之丞門人として金春流地謡として抱えられていた。二代目より宝生流となり、五代目に明治維新を迎えた。『名寄(林)』

には四代・五代の記事が載る。『市史(風)』より初代から三代の記事を引用すると、

丹羽四郎は金春流田中源之丞の門人なり、元禄四年、地謡の雇として出勤し、元禄九年より登用せられて、切米十七石、扶持常三口を給せらる、享保十八年卒す、二代目又吉は宝生太夫の門に入り、父の業を襲ぎ、勤統七十二ヶ年にして、安永八年卒す、其養子安次郎三代目を相続す、天明六年卒して、

となる。『改正 能訓蒙図彙』の尾州住の地謡の項に「田中源之丞弟子 丹羽又吉」という名が見える。宝暦一二年は二代目又吉の時代であり、二代目が尾州住であったことが知られる。またこの田中源之丞は宝生流となった三代目である。三代目源之丞の弟子である以上、二代目又吉は生宝流であったと考えられる。

四代 又吉

『市史(風)』には「其子四代目弥三郎 改名又吉 地謡たり、寛政九年、江戸にて連役兼地謡を命ぜらる、」とある。『名寄(林)』には、

父安次郎

丹羽 弥三郎

寛政四(一七九二)子五月九日 又吉

一 天明六(一七八六) 午七月廿九日、御役者地謡被召抱、御切符金七両・江戸詰扶持三人分・尾州扶持式人分被下。

一 寛政六(一七九四) 寅十一月廿六日、御加金三両被下。

一 同九(一七九七) 巳六月廿五日、安田金三郎連役被仰付、御切米拾五石被成下、地謡をも兼可相勤旨。

一 文化五(一八〇八) 辰正月十一日、芸道出精相勤候付、御加

増米五石被下。

一 同十一(一八一四) 戌十一月廿日、芸道格別出精相勤候付、大夫格被仰付。

連役・地謡之儀も、是迄之通可心得旨。

一 一代切大夫格被仰付候段、可心得旨。

一 同十三(一八一六) 子正月八日、江戸御扶持四人分ニ被成下。

一 同十五(一八一八) 寅三月七日、尾州御扶持三人分ニ被成下。

一 文政七(一八二四) 申正月十一日、家芸格別上達仕候付、御加増米拾石被下之。

御扶持方之儀、江戸五人分ニ被成下。

一 天保六(一八三五) 未二月十三日病死。

地謡・連役を経て大夫格まで上がっている。この時期には、前の代まで地謡のみを勤めているものが、大夫まで勤める例が多くなっている。

五代 又吉

『市史(風)』には、「五代目又吉 初め来次郎、後に吉五郎、次に又五郎と改名 天保六年召出され、宝生鉄五郎の連役を命ぜられ、又地謡を兼ね、安政五年太夫格 一代限 と為る、其後の事績詳ならず、」とある。『名寄(林)』を引用すると、

又吉倅

丹羽 来次郎

天保五(一八三四) 午五月三日 吉五郎

天保七(一八三六) 申五月六日 又五郎

安政三(一八五六) 辰二月二日 又吉

一 文政十三(一八三〇) 寅正月十一日、家芸出精上達仕、追々

御用をも相勤候付、年々銀五枚被下置候、弥出精修行可仕旨。

- 一 天保六(一八三五) 未五月十一日、親跡御役者地謡被召抱、御切米式拾五石被下置。

御扶持方之儀、江戸三人分・尾州式人分被下之。

- 一 是迄被下候銀五枚は引揚。

- 一同九(一八三八) 戊正月十一日、宝生鍔五郎連役被仰付、地謡をも兼可相勤候。

- 一 安政五(一八五八) 午六月廿八日、芸道格別出精仕候付、太夫格被仰付。

連役地謡兼、是迄之通可心得候。

- 一 同日、一代切太夫格被仰付旨。

- 一同六(一八五九) 未二月十八日、御役者御用取扱候内、江戸御扶持四人分ニ被成下。

- 一 慶応三(一八六七) 卯九月十日、御役者御用取扱之廉ニ付、銀式枚為雑用被下置。

- 一 明治二(一八六九) 巳十月七日、当御時節御吟味之譯有之候付、御役者差免、御宛行ハ引揚候老年迄相勤候付、一代切御扶持式人分差遣候。

雑用銀も引揚候。

- 一同(一八六九) 年同月廿三日、小普請頭支配之筈候。

となる。五代目は御役者御用取扱を勤めている。宝生鍔五郎の連役から大夫格に登り、鍔五郎が辞めさせられた御役者御用取扱を勤めているのであるから、年齢的に鍔五郎よりも上であったことを考えても、藩からの評価はある程度高かったと考えて良いだろう。この時期には、

「大夫」家・「連」家という従来の家格が徐々に崩れ、本人の精進によって「地謡」「連役」「大夫」と上がって行くようになった。また給料も若年の頃は安く、年齢によって徐々に「加増」して行く形式であり、「能力給」的な要素が導入されているように思われる。

おわりに

以上金春流から宝生流に転流した家々の代々の事蹟について述べた。『藩士名寄』に転流が命じられていることが記されているのは三代田中源之丞の例しか見あたらなかった。田中家の転流の時期に前後して、田中家の弟子家であった安田家・丹羽家が転流させられたと言えそうである。大野家は、五代目の彦三郎が、すでに宝生流に転流していた安田金三郎の連役となって以来急速に勢力を伸したように現段階の資料からは思われる。役者の転流を進めた時の藩主の好みや、御役者に対する能力給的な扶持の与え方への変更等も今後の研究課題とすべきであろう。

注

- 1 名古屋市蓬左文庫所蔵『藩士名寄』 各家分の所蔵番号 田中家 一四
一〇一六二 二八八 二九三頁
- 2 徳川林政史研究所所蔵『藩士名寄』 各家分の所蔵番号 安田家 Rポ
二六八 三九一四〇頁 宝生家 Rポ二四九 二五〇―二五二頁 大野家
Rポ二五二 二三九―二四三頁 丹羽家 Rポ二四八 二六一―二八頁
- 3 『名古屋市史 風俗編』 著作兼発行者 名古屋市役所 大正四年八月

- 発行 田中家 一六四一―一六五頁 安田家 一六五一―一六六頁 宝生（安田）家 一六四頁 大野家 一五五頁 丹羽家 一六五頁
- 4 拙稿 『藩士名寄』に見る尾張藩御役者の代々（二）―金春八衛門家・林家（金春喜左衛門家）の役者をめぐって― 「社会と情報」 第二巻 第一号 椋山女学園大学生活科学部生活社会科学科 一九九七年九月九一―一〇頁
- 5 『岩波講座 能・狂言Ⅰ 能楽の歴史』 表章・天野文雄著 岩波書店 昭和六二年三月発行 二九六頁
- 6 『能之訓蒙図彙』 表章校訂 能楽資料集成一〇 わんや書店 昭和五五年八月発行 二〇三頁
- 7 『大野氏代々勤書』 『名古屋人物史料 二十六』所収 名古屋市鶴舞図書館 所蔵番号：市一―二七―一三
- 8 同注6 一八三頁

付記

貴重な資料の閲覧を許可いただきました名古屋市蓬左文庫・名古屋市鶴舞図書館、徳川林政史研究所に感謝いたします。また、多大なご教示を頂きました栗花光弥氏に感謝致します。なお本稿は平成九年度文部省科学研究費助成奨励研究（A）「東海地域近世・近代能楽資料の収集と整理」（課題番号：〇九七一〇三一六）による成果の一部となります。

（表1）田中源之丞家の事蹟（名古屋市蓬左文庫所蔵『藩士名寄』による。）

代	通称	元号	年	西暦	月	日	事	績
1	源之丞	貞享	5	1688	9		綱誠（尾張藩3代藩主 泰心院）の御部屋住の時に御目見、無足で6年間勤める。	
1	源之丞	元禄	7	1694	4		切符金30両・扶持常3人分を得る。	
1	源之丞	元禄	14	1701	6	29	病気のため、隠居・養生したいということで「依願御免」の形で御役者をやめる。俸半平に源之丞通り切米・御金を下される。	
2	半平	元禄	14	1701	6	29	父源之丞の「依願御免」により、切米60石・金20両・江戸扶持6人分・尾州扶持4人分を引き継ぐ。	
2	半平	宝永	7	1710	3		半平より源之丞と改名。	
2	源之丞	享保	7	1722	6	19	金春喜左衛門の病気のため、数年間江戸・尾州の御用を1人で勤め、授任事なども精を出して勤めたと御用人より申達があったので、合力金20両を切米20石に直し、切米を合計80石とする。	
2	源之丞	享保	12	1727	5	29	近年御儉約ではあるが、諸事心付宜しく、精を出して勤めたということで、褒美銀5枚を得る。	
3	百一郎	享保	12	1727	12		継友（尾張藩6代藩主 晃禅院）へ御目見。	
3	百一郎	寛保	1	1741	12	15	「父勤功」により召出され、年々銀10枚を得る。	
3	百一郎	寛保	2	1742	1		江戸扶持4人分・尾州3人分を得る。	
3	百一郎	延享	1	1744	4	19	父源之丞の「年来出精」により、加銀10枚。合計銀20枚を得る。	
2	源之丞	宝暦	7	1757	5	15	病死。	
3	百一郎	宝暦	7	1757	7	1	父源之丞病死と、その「末期願置候趣」により大夫となる。切米60石・銀20枚・江戸扶持6人分・尾州扶持4人分を得る。これまでの合力金・銀は召し上げとなる。宝生流に転流を命じられる。	
3	源之丞	宝暦	7	1757	7		百一郎より源之丞と改名。	
3	源之丞	宝暦	12	1762	7	21	町人の他借付の出来ない公金を町人と偽って借り、上納が滞る。このため町奉行裁許となり、日限を区切って納入するよう申し渡しがあったが、それもとびたび延引となったので所預となった。今年5月に上納銀を差し出して事済となった。扶助を受ける身分で、身分を偽って証文を差し出し、公金を借用し、そのみか返却が滞って一旦は所預にもなり、大変不都合であるので「御暇」となる。住所は構無し。	

『藩士名寄』に見る尾張藩御役者の代々(二)

(表2) 安田(宝生)家の事蹟

代	通称	元号	年	西暦	月	日	事 績	典 拠
1	傳六	貞享	5	1688			綱誠に謁す。	市史(風)
1	傳六	元禄	7	1694			切符銀・扶持方を得る。	市史(風)
1	傳六	元禄	14	1701			切米20石・江戸扶持4人分・尾州扶持2人分を得る。	市史(風)
1	傳六	享保	8	1723			職を辞める。	市史(風)
2	又次郎	享保	8	1723			安田傳六跡、連役となる。	市史(風)
2	又次郎	宝暦	13	1763			職を辞める。	市史(風)
3	金三郎	宝暦	13	1763			太夫並役になる。	市史(風)
3	金三郎	明和	2	1765			宗睦長子治休の命により「望月」を演じる。	市史(風)
3	金三郎	明和	3	1766			家元より「道成寺」の伝授を受ける。	市史(風)
3	金三郎	明和	7	1770			太夫本役となる。	市史(風)
3	金三郎	安永	3	1774			死去。	市史(風)
4	初太郎	安永	4	1775	12	9	年々金10両ずつを得る。同朋支配となる。	藩士名寄(林)
4	金三郎	天明	4	1784	2		初太郎より金三郎へ改名	藩士名寄(林)
4	金三郎	天明	8	1788	12	21	大夫並役となり、切符銀20枚・江戸扶持4人分・尾州扶持3人分を得る。	藩士名寄(林)
4	金三郎	寛政	6	1794	11	26	加銀10枚を得る。	藩士名寄(林)
4	金三郎	寛政	8	1796	12	26	大夫となる。御切米30石・江戸扶持5人分・尾州扶持3人分を得る。	藩士名寄(林)
4	金三郎	寛政	13	1801	1	11	「家芸出精」のため加増米10石を得る。	藩士名寄(林)
4	金三郎	文化	8	1811	12	9	江戸扶持6人分・尾州4人分となる。	藩士名寄(林)
4	金三郎	文政	2	1819	1	12	「家芸出精」のため加増米10石を得る。	藩士名寄(林)
	鷹五郎	文政	10	1827	1	11	父金三郎が数十年「出精」して勤め、また本人も「家芸出精上達」したため、年々銀10枚・江戸扶持4人分・尾州扶持3人分を得る。	藩士名寄(林)
	鷹五郎	文政	11	1828	7	5	扶持方を差上、実方へ立ち戻る。	藩士名寄(林)
4	金三郎	文政	12	1829	4		安田金三郎を宝生と改姓。	藩士名寄(林)
4	金三郎	文政	12	1829	5	2	病死。	藩士名寄(林)
5	鏡五郎	文政	12	1829	7	29	若年ではあるが、御用立までは宝生大夫が弓 請け、御用の節は宝生大夫・古春左衛門が勤めるとのことで、親跡に大夫となり、御切米35石・江戸扶持5人分・尾州扶持3人分を得る。	藩士名寄(林)
5	鏡五郎	嘉永	1	1848	12	27	「常々心懸薄趣」により、御役者御用向取扱を免じられる。	藩士名寄(林)
5	鏡五郎	明治	2	1869	10	8	三等兵隊となる。	藩士名寄(林)

(表3) 大野家の事蹟

代	通称	元号	年	西暦	月	日	事 績	典 拠
1	彦七						同姓(大野)寿軒が松平義昌(尾張藩二代藩主光友子、得安院)の医師を勤めていた由縁で、二男彦七が御側御出入に仰せつけられる。生得能い声で、謡曲が達者であったので、謡・仕舞等御相手を勤めていた。	大野氏代々勤書
1	彦七	貞享	2	1685			光友(瑞龍院)の望みにより、表役者・地謡となり、譜代席となる。充行は30石の筈であったが、古くより仕えているものが30石で据え置かれていたため、「新古之御差別」のため、切米20石・江戸扶持6人分・尾州扶持5人分、合計切米30石同様の待遇を得る。	大野氏代々勤書
2	彦次郎	元禄	5	1692			切符金1枚・扶持2人分を得る。	大野氏代々勤書
1	彦七	元禄	10	1697			隠居	大野氏代々勤書
2	彦次郎	元禄	10	1697			親跡(地謡)を継ぐ。切米20石・江戸扶持6人分・尾州扶持5人分を得る。従来の切符金・扶持はなくなる。	大野氏代々勤書
2	彦次郎	元禄	12	1699			病死。	大野氏代々勤書
3	彦七	元禄	12	1699			彦次郎跡へ召し抱えられる。切米20石・江戸扶持6人分・尾州扶持5人分を得る。	大野氏代々勤書
4	友七	元文	3	1738			無足にて8年勤める。	大野氏代々勤書
3	彦七	延享	2	1745			病死。	大野氏代々勤書
4	友七	延享	2	1745			彦七跡へ召し抱えられる。切米20石・江戸扶持4人分・尾州扶持2人分を得る。	大野氏代々勤書
5	友三郎	明和	5	1768			御謡初の節から無息にて5年勤める。	大野氏代々勤書
4	友七	明和	9	1772			病死。	大野氏代々勤書

5	友三郎	明和	9	1772	10	10	父友七跡に御役者地謡として召抱えられ、切符金7両・江戸扶持3人分・尾州扶持2人分を得る。	名寄(林) 勤書
5	友三郎	安永	9	1780	3	29	「家芸出精」により加金3両を得る。(合計：切符金10両)	名寄(林) 勤書
5	友三郎	天明	6	1786	4	26	切米15石を得る。(勤書：切符金は召上られる。)	名寄(林) 勤書
5	友三郎	寛政	1	1789	5	26	安田金三郎連役となる。(勤書：連役とのみ記述。)	名寄(林) 勤書
5	友三郎	寛政	9	1797	1	16	加増米5石を得る。(合計：切米20石)	名寄(林) 勤書
5	彦三郎	寛政	9	1797	7	2	友三郎より彦三郎と改名。	藩士名寄(林)
6	時太郎	文化	6	1809			時太郎生。(逆算)	大野氏代々勤書
5	彦三郎	文化	11	1814	11	26	「多年芸道出精」により、一代切大夫格となる。連役もこれまで通り勤めること。加増米5石を得る。	名寄(林) 勤書
5	彦三郎	文化	12	1815	7		上使御用の節、本役同様の役儀を勤める。	大野氏代々勤書
5	彦三郎	文化	12	1815	12	晦日	江戸扶持4人分となる。	名寄(林) 勤書
5	彦三郎	文化	13	1816			御謡初御用の節、本役同様の役儀を勤め、拝領物を頂く。	大野氏代々勤書
6	時太郎	文化	13	1816	1		御城奥舞台で御慰能・御囃子を命じられ、無息で勤める。中奥にて、御扇子・中啓1本、大扇1本を御側より拝領する。	大野氏代々勤書
5	彦三郎	文化	13	1816	8	17	御役者御用取扱となる。年々役料金2分を得る。(勤書：年々200疋)	名寄(林) 勤書
7	藤五郎	文化	14	1817			藤五郎生。(逆算)	大野氏代々勤書
5	彦三郎	文化	15	1818			謡初御用の節「前振同様」の役を命じられる。	大野氏代々勤書
5	彦三郎	文化	15	1818	3	1	尾州扶持3人分となる。	名寄(林) 勤書
5	彦三郎	文政	2	1819	閏4		上使御用の節「前振同様」の役を命じられる。	大野氏代々勤書
5	彦三郎	文政	3	1820			謡初御用の節「前振同様」の役を命じられる。都合切米25石を得る。	大野氏代々勤書
5	彦三郎	文政	3	1820	2	4	病死(勤書：日付不記)	名寄(林) 勤書
6	時太郎	文政	3	1820	4	12	若年ではあるが、御用立までは矢田金之丞・大山義六が後見し、御用の時は名代を勤めることで御役者地謡となる。切米20石・江戸扶持3人分・尾州扶持2人分を得る。(現米合計：29石)(勤書：後見・名代に関する条件は不記。)	名寄(林) 勤書
6	時太郎	文政	3	1820			「願之上」江戸へ行き、宝生大夫へ随身する。	大野氏代々勤書
6	時太郎	文政	5	1822	11	6	安田金三郎連役(地謡兼)となる。(勤書：連役になったことのみ記す。)	名寄(林) 勤書
7	藤五郎	天保	2	1831			「願之上」江戸へ行き、宝生大夫に寄宿中、3年間雑用金5両ずつを得る。「願継(期間延長のことか?)」とも合計5年間5両ずつを得る。	大野氏代々勤書
7	藤五郎	天保	3	1832	4		斉温(尾張藩11代藩主、源備)任官祝儀御能の宝生大夫子方を勤める。これより謡初御用・御慰御能・御囃子等を勤める。	大野氏代々勤書
6	時太郎	天保	6	1835	1	11	「芸道格別出精」により、一代切大夫格(連役・地謡兼)となり、加増米5石を得る。(現米合計：34石)	名寄(林) 勤書
7	藤五郎	天保	7	1836			順養子(時太郎の養子の意味か?)になる。	大野氏代々勤書
7	藤五郎	天保	11	1840	1	19	「芸道上達」により、年銀5枚を得る。(勤書：日付不記)	名寄(林) 勤書
6	時太郎	天保	13	1842	12	26	「芸道格別存入」により、大夫並となる。加増米10石を得る。江戸扶持5人分・尾州扶持3人分となる。連役・地謡の兼務を解かれる。この待遇は「家格」とはならず、一代切とされる。	名寄(林) 勤書
6	時太郎	天保	13	1842			御役者御用取扱となる。詰となるよう命じられ、詰扶持5人分、路銀6両ずつを得る。斉荘(尾張藩12代藩主 源懿)稽古の際、御相手御用を命じられる。	大野氏代々勤書
7	藤五郎	弘化	4	1847	2	29	「芸道格別上達」により、加銀5枚を得る。(合計：銀10枚)(勤書：日付不記)	名寄(林) 勤書
7	藤五郎	弘化	4	1847	8		「願之上」江戸へ行き、宝生大夫へ随身修行中、御次稽古を命じられる。斉荘・慶藏・慶勝の相手等、両地御用を勤める。	大野氏代々勤書
6	時太郎	嘉永	1	1848	5	24	「芸道格別宜仕」により一代切大夫となる。加増米5石を得る。	名寄(林) 勤書
6	時太郎	嘉永					慎徳院(第12代將軍家慶)の思召で中奥御舞台御能の節、役儀を勤める。	大野氏代々勤書
6	時太郎	嘉永	4	1851			当分江戸定詰にて勤めるよう命令があった。御役者御用取扱を時太郎一人に命じられた。斉荘の思召で、慶藏が田安御屋形にいた当時より稽古相手を勤めた。藩相続後も(稽古相手は)継続して勤めた。	大野氏代々勤書
7	藤五郎	万延	1	1860	1	28	連役並地謡兼となる。切符銀10枚・江戸扶持3人分・尾州扶持2人分を得る。是迄の雑用銀は引き揚げる。(林：地謡兼は不記。)	名寄(林) 勤書
6	時太郎	文久	2	1862	5	20	御暇(願之通)	藩士名寄(林)
7	藤五郎	文久	2	1862	5	20	親跡御役者(連役地謡兼)となる。切米20石・江戸扶持3人分・尾州扶持2人分を得る。これまでの銀子・扶持は引き揚げとなる。	藩士名寄(林)
7	藤五郎	明治	2	1869	10	8	3等兵隊となる。	藩士名寄(林)

『藩士名寄』に見る尾張藩御役者の代々(二)

(表4) 丹羽家の事蹟

代	通称	元号	年	西暦	月	日	事 績	典 拠
1	四郎	元禄	4	1691			地謡の雇として出勤、田中源之丞門人。	市史(風)
1	四郎	元禄	9	1696			切米17石・常扶持3人分(現米合計:22石4斗)を得る。	市史(風)
1	四郎	享保	18	1733			死去。	市史(風)
2	又吉	安永	8	1779			死去。宝生大夫弟子。勤続72年	市史(風)
3	安次郎	天明	6	1786			死去。2代の養子。	市史(風)
4	弥三郎	天明	6	1786	7	29	御役者地謡となる。切符金7両・江戸扶持3人分・尾州扶持2人分(現米合計:9石)を得る。	藩士名寄(林)
4	又吉	寛政	4	1792	5	9	弥三郎より又吉へ改名	藩士名寄(林)
4	又吉	寛政	6	1794	11	26	加金3両を得る。	藩士名寄(林)
4	又吉	寛政	9	1797	6	25	安田金三郎の連役・地謡兼となる。切米15石(現米合計24石)を得る。	藩士名寄(林)
4	又吉	文化	5	1808	1	11	「芸道出精」により、加増5石を得る。(現米合計:29石)	藩士名寄(林)
4	又吉	文化	11	1814	11	20	「芸道出精」により、一代切大夫格・連役・地謡兼となる。	藩士名寄(林)
4	又吉	文化	13	1816	1	8	江戸扶持4人分となる。(現米合計:30石8斗)	藩士名寄(林)
4	又吉	文化	15	1818	3	7	尾州扶持3人分となる。(現米合計:32石6斗)	藩士名寄(林)
4	又吉	文政	7	1824	1	11	「家芸上達」により加増米10石を得る。江戸扶持5人分となる。(現米合計:44石4斗)	藩士名寄(林)
5	来次郎	文政	13	1830	1	11	「家芸出精」により年銀5枚を得る。	藩士名寄(林)
5	吉五郎	天保	5	1834	5	3	来次郎より吉五郎に改名。	藩士名寄(林)
4	又吉	天保	6	1835	2	13	病死。	藩士名寄(林)
5	吉五郎	天保	6	1835	5	11	親跡御役者地謡となる。切米25石・江戸扶持3人分・尾州扶持2人分を得る。(現米合計:34石)銀5枚は引揚。	藩士名寄(林)
5	又五郎	天保	7	1836	5	6	吉五郎より又五郎と改名。	藩士名寄(林)
5	又五郎	天保	9	1838	1	11	宝生鎮五郎連役・地謡兼となる。	藩士名寄(林)
5	又吉	安政	3	1856	2	2	又五郎より又吉と改名。	藩士名寄(林)
5	又吉	安政	5	1858	6	28	「芸道出精」により、一代限大夫格・連役・地謡兼となる。	藩士名寄(林)
5	又吉	安政	6	1859	2	18	御役者御用取扱を勤めている間、江戸扶持4人分を得る。(現米合計:35石8斗)	藩士名寄(林)
5	又吉	慶応	3	1867	9	10	御役者御用取扱により雑用銀2枚を得る。	藩士名寄(林)
5	又吉	明治	2	1869	10	7	「御役者差免」の形で御役者を辞める。宛行・雑用銀は引揚。一代切御扶持2人分(現米:3石6斗)を得る。	藩士名寄(林)
5	又吉	明治	2	1869	10	23	小普請頭支配となる。	藩士名寄(林)